

「美の神話」とトニ・モリスンの『青い眼がほしい』

——それでも、ガラスの靴をはきますか？

別 府 恵 子

プロローグ、あるいは「美の神話」公害

昨年6月25日、女性学インスティテュート主催の講演・座談会が開催された。題して「ガラスの靴をはきますか？」¹⁾。多くの女たちが、成長過程のなかで教え込まれてきた「シンデレラ物語」から取られたテーマ、「ガラスの靴をはきますか？」が明示するように、同フォーラムは社会や文化の構造に巧妙に仕組まれた容姿美の規範、そして、とくに女にかけられた価値基準（＝「ガラスの靴」）がいかに女たちの生活だけでなく、その深層意識までも支配しているかを、考える場を提供してくれた。フォーラムでの問題提起は、ミスコンテストの開催をめぐる賛否両論相半ばするなか、あいも変わらず開催される各種「ミスコンテスト」の是非、開催者ならびに応募者双方の「戦略」などについて、その後も色々考えさせられる契機ともなったのである。

1970年代から日本でも盛んになったフェミニズム運動に呼応して、とくに女の上に要求される容姿美への信奉（＝外的基準の押し付け）を、女の意識向上を阻む最大悪として、多くのフェミニストたちが批判してきた。若さ、容貌の美醜という、個人の本质とは直接関係のない外的基準での価値評価は、女たちの間に差別意識を作り、女を女性性のなかに抑圧する道具として利用される。しかし、そのような風潮とは裏腹に依然として「肉体美」や「若さ」の偏重は衰えるどころか、女たち自身（？）が助長さえている感がある。現在、20歳

代の女たちはフェミニズム運動がもたらしてくれた、因習からの解放と自己主張・表現の権利を行使して、まず容貌を変えることによって、皮相的な自己改造に憂き身をやつしているという。美容整形やエステティックサロンの繁盛にひと役買い、また、高価な化粧品や美容器具、ダイエット食品などの購買力を担っているというのである。もっとも、彼女たちが獲得した自己主張の権利・自由といっても単に与えられた権利・自由といった方がより適切かもしれない。なぜなら、彼女たちはポスト・フェミニズム時代に生活し、既得権としての権利や自由を享受しているだけなのだから。いとも、軽やかに遊んでいるかのように見える。彼女たちを整形手術に、エステに、または不自然なダイエットへと、突き動かしている原動力は、外観を美しくすることによって、一ランク上の生活を、よりよい就職先を、仕事を取得するとの上昇志向といえどもっともらしいが、上昇幻想といった方がよりのを得ていよう。

1981年に出版されたコレット・ダウリングの『シンデレラ・コンプレックス』(Colette Dowling, *The Cinderella Complex*) が巻き起こしたセンセーションはまだ記憶に新しい。ダウリングは、女の経済的・精神的自立が称揚される一方、女性心理の奥には秘かに男性依存・結婚願望が潜んでいるとして、それを「シンデレラ・コンプレックス」と診断したが、いま、顕著な社会現象となった女たち（そして社会全体）の容姿美への固執は、ダウリングのいう「シンデレラ・コンプレックス」に通底するところがある。というのも、彼女たちの意識の深層には、たとえ結婚願望は萎えたとしても、男性（＝権威）依存は、なお根強く潜在するからである。

もっとも、容貌を変えてみても、本当の意味での自己改造にはならないし、また人生が一変することにはならない。さらに一層外見にとらわれるという悪循環になるだけである。それでは、何が彼女たちを限りない向上幻想に駆り立てるのか。その解答は「シンデレラ物語」の結末が如実に示してくれる。すなわち、王子（＝男）に認められるためには、美の規格（＝ガラスの靴）に合わせる必要がある。事実、シンデレラの姉たちは、足の指やかかとを切断してで

もガラスの靴をはこうと、文字どおり痛ましい努力をする。金銭や権力を、あるいはそうした財力、権力の保持者である男たちの寵愛を得るために。というのも、この世の財力や権力は、依然として男たちの手中にあり、女たちは間接的に権力や富を享受するという社会・経済装置は変わらないからである。極言すれば、女たちは生き残るために、男たちの関心を買おうと必死の努力を続ける。

元来、女たちが容姿美を信奉し、若さを持続させることに全身全霊を傾けてきたのは、いつに、権力、財力を持つ男たちに認められるためであったことを、数々の物語は教えてくれる。「シンデレラ物語」はその一例であり、また、その原型はギリシャ神話「パリスの審判」に見ることが出来る。

ある時、争いの女神エリスが「最も美しい女に」与えるといった林檎（＝賞品）をめぐって、三女神——ヘラー、アテナ、アプロディーテ——が競い合う。それぞれ「自分が最も美しい」と主張して相譲らない。そこで、争いの調停をトロイ王の子パリスに委託した。三女神はこぞって、パリス買収を考える。ヘラーは全アジアの王にしてやると、アテナは常勝と智を、アプロディーテは人間のなかで一番美しいヘレネーとの結婚を、パリスに約束する。パリスはアプロディーテに軍配をあげ、その報償として「金髪で青い眼」のヘレネーを手に入れる²⁾。

美女伝説、ミスコンテストの始まりである。「パリスの審判」で問題になるのは、三女神が、智や力でなく、容姿美を競い合ったこと、そしてその判定を他者＝男に委ねたことの二つである。以来、女たちは、「鏡よ、鏡、世界で誰が一番美しい」と内ではなく外に向かって問いかける。女たちが、主体性をもってミスコンテストに参加しようと、価値判断は他者（審査員のほとんどが男）であることに変わらない。

最近アメリカでベスト・セラーになったナオミ・ウルフの『美の神話』（Naomi Wolf, *The Beauty Myth*, 1991）が引き起こした論議は、肉体の若さや

容貌の美しさを絶対視する「美の神話」＝「パリスの審判」が、現在も有効であり、単に無邪気な物語で終らないことを実証している。いまなお、「美の神話」が多くの女たちや周囲の社会の価値基準を規定し、女たちの思考を支配し、かれらの人生を操作していることは、「美のイメージが如何に女を抑圧しているか」という『美の神話』の副題が雄弁に物語る。そこで、如何に「美のイメージ」が女たちの意識、思考を洗脳しているかを、トニ・モリスンの『青い眼がほしい』(Toni Morrison, *The Bluest Eye*, 1970) を例証として取り上げ、「美の神話」という文化装置の解体を試みるのが小論の目的である。モリスンの小説に描かれるポーリーン、ピコーラ・ブリードラブ母娘は、支配的文化が形象化されたモノとしての商品や、映像をとおしてつくられた「美のイメージ」に操られる愚かしい犠牲者たちなのだ。

「青い眼の人形」のクリスマス・プレゼント

オルコットの名作『若草物語』(*Little Women*, 1868-69) は、「プレゼントのないクリスマスなんて」("Christmas won't be Christmas without presents.") というジョー・マーチの言葉で始まるが、キリスト教文化、社会においてクリスマス・プレゼントは重大な意義を持つ。神が人類の罪をあがなうために、この世に遣わされたイエス・キリストの降誕祭がクリスマスの由来であり、聖書には「神はそのひとり子を賜わるほどに人を愛された」と記述されている。つまり、クリスマス・プレゼントとは神から人類への贈物、神の愛の印であって、毎年クリスマスに交換されるプレゼントはそうした宗教的・文化的意味を持つ。

もっとも、二十世紀末の混沌とした社会において、クリスマス・プレゼントが指示する宗教的意味は空洞化し、それは支配的文化の一つの形象化、つまり、アメリカ社会における一つの文化シンボル(=記号)でしかない。それはまた、支配的文化から逸脱したものを排除する道具として機能する。アメリカ文化を形成する多くの神話の一つである「美の神話」のシンボルとしての「青い眼の

人形」のクリスマス・プレゼント。それが、一人の黒い肌の少女の自己形成に如何に関わっているかを、ピコーラの話をとおして検討したい。

毎年クリスマス、よい子に与えられる特別のプレゼント——青い眼をした金髪の人形——のようにになりたい、「青い眼がほしい」と思いつづけて（ガラスの靴をはこうとして）、ついに狂気に追いやられた一人の少女、ピコーラの悲劇は、すべてクリスマスに贈られる人形にその端を発するというのが、彼女の唯一の友だちであったクロードディアが語るピコーラの物語の解釈なのだ。

「それは、クリスマスと人形の贈り物から始まった。大きくて、すてきな、特別の贈り物は、いつも大きな青い眼をしたベビードールだった。おとなのたてる鶏に似た声の響きから、私が一番欲しがっているのは人形だと、彼らが考えていたことがわかった。わたしは、人形そのものとその外見にまごついた。それをどう扱えばいいのだろうか？ 人形の母親のふりをするのか？ わたしは、赤ん坊にも母親という概念にもまるで関心がなかった。わたしと同じくらいの年齢と大きさをした人間だけに関心があり、やがて母親になるという予想には全然熱意を感じる事ができなかった。 . . .」(19-20)

ここで問題になるのは、青い眼の人形という文化シンボルに特別の意味が込められていること、そして、それが少女たちのロール・モデルとして教育手段として利用されていることである。「青い眼で金髪」という美の基準が設定され、少女たちは人形の母親の真似事をするというシナリオだ。「それはおかしい」とクロードディアは素直に疑問を抱く。なぜなら、大人たちが少女たちが一番欲しいと思っているもの——ピンクの肌に、大きな青い眼、きれいにカールした金髪の人形——は、ピコーラやクロードディアが鏡のなかに見る自己像（セルフ・イメージ）とは、似ても似つかないものだからだ。ピコーラやクロードディアだけでなく、多くの少女たちが達成することの出来ない自己像、それが

アメリカ社会が女の子（女たち）に期待する理想のイメージ、「青い眼のお人形」という文化シンボル、つくられた「美のイメージ」である。

そうした文化装置は人形の他にも仕掛けられている。小説の中に出てくる一世を風靡した名子役、シャーリー・テンプル（やはり、青い眼のテンプルちゃん）の絵がついた白と青の子ども用のミルク・カップ——いまでいう人気キャラクター商品——なども同様の「洗脳」機能を備えている。ある支配的文化、社会の価値観が特定のシンボルによって形を与えられ、操作され、それらが、毎年クリスマスに儀式のように大人から子どもたちに、特別のプレゼントとして与えられることによって、シンボルが表示する価値観が、幼い子どもの意識のなかに浸透し、その精神を洗脳していく仕組みがここに見られる。つまり、『黒人の魂』の著者、デュボイスがいう「黒人の意識の重層性——アメリカ人とニグロ——他人の眼を介して自己を見る習性³⁾」が形成されていく装置が仕組まれている。もっとも、こうした「髪はブロンド、眼は青色」を女性美の理想とする価値体系のもとでは、「赤毛で、顔中ソバカス」の白人少女の意識や、「肌が黄色で、背の低いアジア系の」少女の意識のなかにも、程度の差こそあれ同種のアイデンティティ・クライシスを引き起こすことになる。外観の美醜を全人格の美醜、善悪の判断に置き換えること、それを是認する思想——「美の信仰」を、「人間の思想の歴史のなかで、おそらく最も破壊的な概念である」（97）とモリスンが断罪する理由がここにある。

クリスマスに贈られる、アメリカ社会が理想とする女性美のシンボル「青い眼のお人形」は、つくられた「美のイメージ」として、人々のなかに差別意識や羨望、敵対心を培養し、女たちの自己認識の確立に否定的（あるいは肯定的）に作用する。自分の身の回りには見ることもない「美のイメージ」を前に、貧しく醜い黒人少女、ピコーラはその存在基盤が崩壊するのを呆然として眺めるしかない。彼女に出来ることは、「消えてしまいたい」（40）と、毎晩祈ることしかない。ある時代、ある特定の社会、文化が是認する女性観、価値観によって、その時代、その社会に住む人々の価値観、女性観、人間像が影響されるの

は当然のことで、「ピンクの肌、青い眼」の少女のみが重宝され、愛される社会では、「黒い肌」のピコーラは無視される。クリスマス・プレゼントの「青い眼をしたベビードール」が支配的文化の一つのシンボルとして、残酷にも、黒い肌の少女を社会から排除する道具として機能する様子を、モリスンは、語り手にピコーラと同じ年頃のクロードディアを使用することによって、一見無邪気な「語り口」を装いながら、見事な筆致で描いていく。

『青い眼がほしい』は、自分の眼さえ青くなれば、母親も友だちも学校の先生も自分を見て（＝愛して——“To see her is to love her.”）くれると信じて、必死の決意でソープヘッド・チャーチという怪し気な医師（＝牧師）を訪れ、眼を青くして貰ったと信じる愚かな少女、ピコーラ・ブリードラブの話であると同時に、その話の語り手クロードディアの精神的成長、彼女の自己認識確立の記録でもある。先に引用したクロードディアのクリスマスに貰う人形についての疑問をもう一度参照すると、最初から彼女は人形のクリスマス・プレゼント自体に不満なのである。「わたしは人形そのものとその外見に」困惑したと述懐する。「それをどう扱えばいいのだろうか？ 人形の母親のふりをするのか？」彼女が絵本で見る「縫いぐるみのアン人形」、その丸い愚鈍な眼や、パンケーキのような顔はグロテスクで、肉体的に反発するものだったし、彼女が喜ぶだろうと大人たちが考えた「青い眼の人形」には、憎悪の気持ちを抱く。「青い眼」に憧れ、つくられた美のイメージの虜となったピコーラと違って、クロードディアの人形への態度は、大人も、年上の女の子も、商店も、雑誌も、新聞も、ウインドーの看板も、世界中がこぞって好ましいとするモノの秘密を探究することだった。

「わたしにはたった一つの欲求だけが残った。つまり、人形をばらばらにしてしまうこと、それがどんなもので作られているかを見、かわいらしさを発見し、美しさを見出し、わたしには感じられなかった——あきらかにわたしだけが例外だったらしい——好ましさをを見つけること」（20）

ここには、世界中が共謀してつくった「美のイメージ」を分析しようとする好奇心がある。クローディアは、青い眼の人形でなく、クリスマスには何か感じるもの、一つの経験が欲しいと願う。たとえば、「おばあちゃんの台所にある低い三脚椅子に腰掛けて、膝にいっぱいライラックの花をおいて、わたしのためだけに弾いてくれるおじいちゃんのバイオリンが聞きたい」(21) という。誰もが欲しがる、ブランド商品——青い眼の人形やシャーリー・テンブルの顔の絵がついたミルク・カップ——でなく、「わたしだけ」の何かを求める、彼女の主体性ある選択に注目したい。クローディアが、自己のセルフ・イメージとは程遠い「青い眼の金髪の人形」に興味を示さないのは、外見の美を信仰することの危険性を本能的に知っているからである。それだけ、彼女は自分をよく見つめ自分が「何か」、「誰か」をよく認識していたといえよう。その自己認識が彼女のアイデンティティ確立を可能にするのである。したがって、ピコーラの身に起こったことの原因はクリスマス・プレゼントの人形にあると、「青い眼の人形」のクリスマス・プレゼントに仕組まれた「美の神話」の装置を見破ることが出来たのである。

「人間の思想の歴史のなかで、最も破壊的な概念」

『青い眼がほしい』に登場する二人の少女、ピコーラ・ブリードラブとクローディア・マックティアの「美のイメージ」＝「青い眼の人形」に対する態度の違いは上に見たとおりである。ピコーラは盲目的に「美のイメージ」の虜になり、狂気に閉じ込められる。一方、「美のイメージ」に対して批判的に挑戦するクローディアは自己認識に目覚め、精神的成長を達成する。言い替えれば、ピコーラの悲劇がクローディアを教育したといえる。もう一つ、彼女たちの運命を左右する決定的要素として二人の家庭環境、とくに母親との関係があげられよう。クローディアの家庭環境を見ると、貧しいとはいえ、彼女には気管支にたんが詰まって咳に悩まされた時、ヴィクスの塗り薬をつけて胸をさすってくれる母親と、家族を貧乏神から護ろうと必死で働く父親、それに遊び相手であ

り喧嘩相手でもある姉のフリーダがいる。一方、ピコーラの家庭はすでに崩壊している。父親は酒に溺れ、妻に乱暴を働き、家に火をつけ、家族は離散。ピコーラはクロード家の家に預けられる。

ここでは、「美の信仰」のもう一人の犠牲者であるピコーラの母親、ポーリーン・ブリードラブについて考察したい。何故なら、成長過程にあるピコーラにとって、その価値観を戦わす相手となるべき母親自身が「美のイメージ」にとらわれていて、ポーリーンは自分自身の存在を容認するためにも醜いピコーラを娘と認知することを拒否するからである。事実、ポーリーンは、娘のピコーラや息子のサムに、常に「ミセス・ブリードラブ」と呼ばせ、自分自身は、メイドとして働く白人中流家庭の仮りの世界に逃避する。したがって、彼女にとって母親は不在である。すでに見たとおり、ピコーラは生まれた時から、母親の折り紙つきの醜い女の子。同級生はもちろんのこと、学校の先生までもが、必要のない限り、ピコーラの方を見ようとはしない。このピコーラの疎外感、孤独感をさらに致命的なものにするのは、母親ポーリーンの娘に対する態度とその教育である。彼女は「息子には、家から逃亡する強い欲求をたたき込み、娘には、大人になる苦しみ、他人への恐怖、生きることの悲しみをたたき込む」。(102) それは、ポーリーン自身が白人中心の社会で黒人女性として生き残るための戦術、周りの社会からたたき込まれた教訓でもあるが、他人への憎悪や恐怖心からは決して健全な人間関係は生まれない。母親からも見棄てられたピコーラの疎外感、恐怖感から、肯定的な生き方が生まれる筈がない。

ポーリーンは娘時代、そしてチョリーとの結婚後も、現実生活の絶望感から逃れるため、ロマンチックな恋に憧れ、映画の夢の世界に自分を忘れることを覚えたという。映画館に居る時だけがポーリーンに生きているという実感を与えてくれるからである。そして、スクリーンで見る女優たち——ジーン・ハーロー——に憧れ、彼女の髪型を真似ることに熱中する。(そうしたポーリーンにとって、前歯を一本失うことは生死に関わる問題である。) 映像がつくった「美のイメージ」に自らを同化させることによって、存在理由を見つけるのである。

その結果、ポーリーンは、映画のスターに象徴された「容姿美」、外観の美しさ、「青い眼をした金髪の人形」の信奉者となり、それが「人間の思想の歴史のなかで、おそらく最も破壊的な概念」(97) だとは知らずに、自分自身の、そして娘ピコーラの人生までも破壊してしまう。ポーリーンの外観だけの美に対する盲信は、ピコーラの悲しくも無心な祈り——「青い眼がほしい」、「愛してほしい」——となって、彼女を破滅に追いやるのである。映画という映像メディアもまた、クリスマス・プレゼントとして贈られる「青い眼の人形」と同様に、ある価値観を大衆の精神構造の奥深くうえつける強力な文化装置としての機能を果たす。恐ろしいことには、現在テレビというより身近な映像メディアの影響(=暴力)があることを考えると、文化の媒体メディアの功罪を改めて考えさせられる。

モリスンが『青い眼がほしい』を書き始めたのは公民権運動たけなわの時期——1960年代後半の1967年。マルコム X やマーチン・ルーサー・キング牧師の指導のもと、「黒い肌は美しい」(“Black is beautiful”)、「黒には黒」(“Black on Black”)などのスローガンを旗印に、黒人たち内部の意識改革が成熟した時期と重なる。薬品を使用して縮れた毛髪を直毛にすることを止め、アフロ・スタイルが流行した時代でもある。(縮れた髪を母親がアイロンで伸ばそうとして、火傷した娘が多くいたということは、まさに、「シンデレラ物語」でガラスの靴をはこうと足の指やかかとを切断するのと同じことの繰り返しである。)つまり、白人社会の価値観に追従し、それを真似るのでなく、黒人たち自身のアイデンティティを確立しだした時期と一致するが、「黒い肌は醜い」という偏見の犠牲になった一人の少女の悲劇をとおして、作者モリスンは逆説的に「黒い肌も美しい」と宣言したのである。

先述のとおり、『青い眼がほしい』は、その「醜さ」のため誰からも相手にされないピコーラの、唯一の友だちだったクロードディアが、ピコーラとの交流の一年間——1940年の秋から1941年の秋——を回想するという形で語られる。それはまた、クロードディアが姉のフリーダと春に蒔いたマリゴールドの種が、そ

の年の秋、「何故」花を咲かせなかったかという疑問への答えを見つけることでもあった。もちろん、父親に強姦され、その子を宿したピコーラの気が狂い、早産した子どもが死んだ年の秋は、確かにマリゴールドの花の咲かない不毛の季節だったが、それは単に一人の少女の悲劇ではなく、狂ったアメリカ社会全体の悲劇、不毛の季節だということを、後になってクロードディアは理解する。ピコーラの悲劇の真の意味をクロードディアが認識するには時間の経過を要したが、クロードディアは、彼女の回想を次の様に結ぶ。

今では、あの年国中の土地にマリゴールドの花が咲かなかったと信じられる。ここの土地にはある種の花は咲かないのだから。ある種の種は育たず、実を結ばないのだから。大地自体がその意志で、種を殺してしまう時、私たちは黙ってあきらめ、犠牲者には生きる権利がなかったのだというのだ。もちろん、この考えは間違っているのだけど、どうすることも出来なかった。(160)

ここの土地＝アメリカには、ある種の花＝マリゴールドは咲かないのだから、ということになる。常に「アメリカ人とニグロ」という二つのアイデンティティの間を揺れ動いている黒人たちが、白人文化の支配するアメリカ社会のなかで、生きのびて行くには強靱な精神力が必要だ⁹⁾と、デュボイスは書いたが、まさに、その強靱な精神力がピコーラにはなかった、だから「犠牲者には生きる権利がない」ということは、間違っているのだと、生き残ったクロードディアは断言する。このクロードディアの発言こそ、白人中心、男性中心のアメリカ社会のなかで、70年代までは聞かれなかった、人種かつ性差別を受けてきた多くの「ピコーラ」たちの痛恨の叫び声なのだ。「何故」クロードディアが支配的文化の暴力から自らを護ることが出来たのか、ピコーラと違って、彼女にはその価値観を戦わせる相手に母親や姉がいたからだが、さらに重要な点は、上に見たように、クロードディアがデュボイスのいう強靱な精神の持ち主だったからである。

気の狂ったピコーラが、自分の眼は誰の眼よりも青いとクロードディアにいわせようと何度も同じ質問を繰り返すが（152-53）、それは、まさしく、「鏡よ、鏡、世界で誰が一番美しい」という『白雪姫』= *Snow White* の王妃の繰り返言の変形であり、世界中の女たちがいまも、鏡に向かって、繰り返しつつやく呪文なのだ。ピコーラに同情するクロードディアも、その執拗さに呆れかえり、退屈して、魔法の鏡の役をすることを止める。自分の家の庭に姉のフリーダと蒔いたマリゴールドの種が「何故」花を咲かせなかったか、「何故」ピコーラの気が狂い、その赤ん坊が死んでしまったかの「何故」（“Why”）の詮索は難しいから、事件の経緯だけ（“How”）を語ろうとしたモリスンの語り手、クロードディアは見事にその「何故」を語っていたことになる。友だちの悲しい夢と愛の話を記すことによって、みんなの憧れの「青い眼の人形」を壊していた少女は、新しい自己認識に到達するのである。

わたしは、死んだ方が良くと誰もが願った赤ん坊のことを思う。はっきりとこの目でみた赤ん坊を。0の字のようにくると縮れたウールの毛がふさふさした頭、黒い顔。ニッケル銅貨の大きさの澄んだ二つの黒い瞳。先が広がった鼻。キッスをしている時のような厚い唇。そして、生きて呼吸している光沢のある黒い絹の肌。それは、合成繊維の金髪が、ガラス玉の青い眼の上にかかり、ツンとつまんだ鼻、弓の様な口元をした人形でない。わたしは、ピコーラへの友情より強く、その黒い赤ん坊が生きることを願ってくれる人がいて欲しいと思ったのだ。たとえ、それが、白い肌のお人形、シャーリー・テンプル、モーリーン・ピールを可愛いと思っている世間を見返すためだけであつたとしても。（148）

最初、「青い眼の人形」のクリスマス・プレゼントをどう扱ってよいか思案していたクロードディアは、人形でなく、現実に生きている黒い肌の赤ん坊——自己像——を尊重したいと告白している。ここに、クロードディアの意識の変化、そして彼女の自己確立を見ることが出来るのである。自己を語る理性と手段＝言

葉を失ったピコーラにかわって、彼女の悲しい運命を理解しようとする行為——物語ること——によって、クロードディアの白い肌の人形に対する憎しみは、白い肌の人間に転移されることなく、静かに昇華される。先にも触れたように、『青い眼がほしい』は、ある種の——青い眼で金髪——少女のみが重宝されるアメリカ社会のなかで、操作された「美のイメージ」にとらわれ、自滅したピコーラの物語であると同時に、「美の神話」という文化装置のからくりを見破り、自然体の自分自身を発見し、再認識することの出来たクロードディアの物語なのだ。

エピソード、それでも、ガラスの靴をはきますか？

「パリスの審判」も「シンデレラ物語」も、昔話。しかしながら、「物語」のシナリオは、人名、地名を変えて、今様「パリスの審判」、「シンデレラ物語」として繰り返される。トニ・モリスンの『青い眼がほしい』は、ガラスの靴をはこうとして、足の指だけでなく、その精神まで破壊された一人の少女の話。そして、その友だちの話を語ることによってガラスの靴をはくことを止めた、もう一人の少女の話。

ハムレットの悲劇を後世に語り伝えたのは友人のホレーイショだった。つい最近まで、悲劇のヒロインの話を後世に伝える語り手（＝友人）が存在しなかったことを考えると、ピコーラの話語ったクロードディアの役割は大きい。何故なら、「美の神話」あるいは「若さの神話」は、厳然としてわたしたちの周りで、宣伝され、ささやかれているからである。

かつて女子の求人広告には、必ずといってよいほど「容姿端麗」という条件が付記されていた。また、ある航空会社の女性乗務員が規定の体重を超過したとの理由で解雇を言い渡され、社会問題になったのもそう遠い昔のことではない。先に触れた、女性学インスティテュート主催の座談会で、女子大生の就職に関して、少々気になる事実が報告されたことを思い出す。山口典子氏の調査によると、東京のある女子短期大学では、卒業生の大手企業、大手商事会社へ

の就職率も上げるため、入学時に容姿、容貌別にあるタイプの学生を意識的に入学させているという、調査結果が開示された。もし、入学偏差値なみの就職偏差値「神話」が、つくられつつあるのだとしたら、一笑に付すには、おぞましい話である。なぜなら、こうして、「パリスの審判」、「シンデレラ物語」は書き換えられ、ある説得力をもって語り伝えられることになるからである。また、「美の神話」、「若さ神話」を吹聴する言語表現上の公害——「ブス」、「婆アやオバサン」⁹⁾ など——は数知れないであろう。「だから、ガラスの靴をはくのですか？」

もっとも、この小論で取り上げた、モリスンの『青い眼がほしい』の例に見たように、「美の神話」の犠牲に供される「イノセンス」が存在する一方、そのからくりを冷徹な眼差しで見破り、「神話」解体を可能にする「知性」も存在することを、さらに選択の自由は、一人ひとり個人のものであることを強調しておきたい。

それでも、ガラスの靴をはきますか？

注

- 1) 同講演会は本学女性学インスティテュート1992年度の活動の一つとして、山口典子氏（堺市女性団体連絡協議会事務局長）を講師に迎え、キャサリン・プロデリック氏（本学文学部英文学科教授）との対談形式で開催。
- 2) 高津春繁著『ギリシャ神話』（岩波書店、1965年）、151－152頁。
- 3) W. E. B. DuBois, "The Souls of Black Folk" in *Three Negro Classics* (1903; New York: Avon Books, 1965), p. 215.
- 4) (注3) 参照。
- 5) *The Life of Kobe College '91*（「おちょぼ口」・別冊、p. 5）などその一例。

参考文献

Morrison, Toni. *The Bluest Eye* (New York: Washington Square Press, 1970) 本文中の引用文の頁数は同書のもの。なお、訳文は大社淑子訳『青い眼がほしい』（朝日新聞社、1981年）を参考にした。

Bernikow, Louise. *Among Women* (New York: Harmony Books, 1980).

別府恵子「トニ・モリソン」、『アメリカ文学の新展開・小説』（尾形敏彦編、山口書店、1983年）。

Dowling, Colette. *The Cinderella Complex* (New York: Summit Books, 1981).

DuBois, W. E. B. "The Souls of Black Folk", *Three Negro Classics* (New York: Avon Books, 1965). Intro. John Hope Franklin.

Harris, Trudier. *Fiction and Folklore: The Novels of Toni Morrison* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1991).

高津春繁『ギリシャ神話』（岩波書店、1965年）。

Wolf, Naomi. *The Beauty Myth: How Images of Beauty Are Used Against Women* (New York: Doubleday, 1991).

*本稿は、1992年11月25日、園田女子大学に於ける女性学講座での講演、「クリスマスに何を貰ったの？——トニ・モリスンの『青い眼がほしい』」、および尾形敏彦編『アメリカ文学の新展開・小説』（山口書店、1983年）に所収の拙論「トニ・モリソン」と一部重複することを、断わっておく。なお、本稿執筆に際し、拙論「トニ・モリソン」でのカタカナ表記（ペコラをピコーラ）と訂正する機会を与えられたことを感謝する。

Summary

“The Beauty Myth” and the Blue-eyed Baby Doll in Toni Morrison’s *The Bluest Eye*

Keiko Beppu

Horatio abstains from felicity a while, entreated by his friend, to tell the story of Prince Hamlet. In the culture that loves its blond, blue-eyed children, who will tell the story of a black girl who dreams of having blue eyes so as to be loved? In Toni Morrison’s *The Bluest Eye* (1970) Claudia MacTeers becomes to her friend Pecola what Horatio was to Prince Hamlet.

The innocent blue-eyed baby doll given to little girls every Christmas becomes a potent cultural symbol in American society that loves its blue-eyed children; this image of beauty is then used against black girls *and* women who can never attain such image of beauty. They are told to be just like an innocent blue-eyed doll if they were to be loved. The world seems to be in conspiracy to control women within the narrow confines of their femininity, whispering to them: “It’s best to be pretty—— then you are assured of love and happiness. See the story of Cinderella?” Cinderella lived happily ever after with the Prince, we are told, because her foot fit into the glass shoe, in other words she is a blue-eyed beauty.

The Bluest Eye is a tragedy of Pecola Breedlove who foolishly believed in the idea of physical beauty, “the most destructive idea in the history of human thought.” Morrison’s novel is also a story of Claudia Macteurs, who sees through the destructive mechanism “the beauty myth” entails:

how the images of beauty——the blue-eyed baby doll, the Shirley Temple milk cup, and many others——are employed to indoctrinate women, just as the idea of femininity used to, with “the myth of pretty woman”—woman’s success story. A familiar story.